



灰に、なるまで

敵の攻撃は続いていた。昼夜問わず、の苦しみを一体誰が分かるであろう。

時折間近に砲弾が落ち、暗やみが揺さぶられ小さな石ころが鉄帽に降り、その度に空気が緊張した。

暗く蒸し暑い壕の中で、兵士たちは無言だ。息を潜め、身を寄せ、背を丸めて座っている様は虫の冬眠さながらだが、次の瞬間にでも敵の砲弾が壕の真上に落ちたなら、この壕は彼らの肉体を押しつぶし吹き飛ばし消し飛ぶであろう。

故郷から遠く離れたこの戦場で、ただの肉の塊になって彼らは死んでいくのである。

吉川は、爆音の中で震える兵士たちの群れに紛れ、足を抱えて座っていた。圧倒される死の影に怯えながら今、彼が意識の底で逃避する先は故郷であった。

吉川の故郷は、山々に囲まれた静かな村である。桜が咲く緩やかな川があり、青々と風に揺れる水田があり、色とりどりの花が咲く村であった。音といえば鳥のさえずりや葉のこすりあう音くらいで、このような乱暴な音に囲まれたことは彼には経験がない。

轟音と震動に我に帰り、はたと己の手と足とを見れば、闇に閉ざされ熱気に蒸され、ここは一体どこであろうか。鼓膜が捕えるものは爆音と悲鳴、時折僅かに舞う壕の壁の砂が落ちる音で、眠りを誘う木々の音や水の音はどこにもなかった。

恐怖は、一瞬の迷いは、そのまま己に死をもたらすものである。

それは、駆けるしかない足を止め、敵の銃弾を引き寄せた。兵らの失望も、ただの旗一枚で繋がる彼らの絆にとっては命取りであった。

高野は、この部隊に唯一残された士官である。

彼は腕を組み、暗闇の中で身動き一つせず座していた。それも、足元に身を寄せ合う兵士たちより少し高いところで、まるで石像のようにしているのだ。

砲撃の地鳴りも振動もものともせず、微動だにせずただ黙しているのだった。胸元には士官の証である星が、壕に置かれた儚い蠟燭の灯りに煌めいていた。

先ほどまで高野の上にもう一人士官がいた。

だが、彼は発狂した。

壕の外へ出ようとして、暴れ始めたのである。

あの悲鳴のような、泣き声のような褒め言葉と命令とを、高野は胸中で反芻させている。剥がしてしまいたいあの声は、粘着を持って彼の肌や神経に纏わりついてしまったのだ。

部隊は士官の発狂に動揺した。相手は理性があるのかないのか、はた目からは分からなかった。

本音のようにも思える叫びを狂っていると処理したとしたら、自分たちも彼と同じ狂人であろう。

灰に、なるまで。

---

それはすでに放送されたものが録音されて小さな箱に入っているだけであった。だから、唸り声を上げて弾着する砲弾の炸裂音などにかき消されることもなく、安物のヘッドフォンから言葉がとうとうと垂れ流されていく。

遠くに殷々と響くミサイルの音を微かに聞きながら、薄暗い天幕の中で安原は寝がえりを打った。深い緑色をした堅い雑毛布に包まって聞くラジオは、遠く祖国の人々の息遣いを安原に届けている。

「娯楽だと」

嘲笑うように言って、上官が小さな黒い機械を安原に寄こしたのは、状況解除後にここへ戻ってきてすぐであった。血と汗とを浴びた銃をいそいそと分解し、油を塗ろうとしていた安原は、解体した銃の部品の横に捨てられるようにして与えられた機械を眺め、小さく呟く。

「GPSですか」

「阿呆、そんなものをうちの国が寄こすわけないだろう。町の方にお国のテレビ局が来たんだよ。俺たちのために国のラジオを聞かせてくれるらしい」